

## 芦屋市精道国民学校の

### 学童集団疎開にみる

#### 「子ども時代の戦争体験」

人見 佐知子

はじめに

小稿は、戦時期の子どもの体験について、精道国民学校（兵庫県芦屋市）学童集団疎開体験者への聞き取り調査から、その歴史的特質を明らかにしようとするものである。

甲南大学人間科学研究所では、「子ども時代の戦争体験」調査の一環として、二〇〇八年度から学童集団疎開体験の聞き取り調査を実施してきた。ご協力いただいたのは、当時芦屋市精道国民学校の五年生で、岡山県上房郡高梁町（現・高梁市）の頼久寺（地図）へ集団疎開した、五名である。

精道国民学校の学童二二九名が上房郡高梁町・川面村へ集団疎開したのは、一九四五年（昭和二〇）七月一日からの約三ヶ月間である。二二九名のうち、三年生から五年生までの一四四

名が頼久寺に疎開した。

頼久寺への集団疎開については、疎開者自身によって作成されたいくつかの記録がある<sup>①</sup>。疎開先再訪のようすは新聞に取りあげられたり<sup>②</sup>、地元メディアで報じられる<sup>③</sup>などした。それらは「資料」として貴重である。

というのは、芦屋市の学童集団疎開については公的史料に乏しく、まとまった公文書としては管見の限り高梁市立図書館所蔵の「集団疎開綴」を除いてみあたらないからである。当研究所における聞き取り調査は、こうした史料的制約を克服することを目的のひとつに実施された。

当研究所が実施して

きた「子ども時代の戦争体験」についての聞き取り調査の特徴は、心理学的調査と歴史学的調査の協働にある<sup>④</sup>。共通の研究目的は、第一に一定の方法論によって戦争体験を記録すること、第二に記録された体験からそれらを理解するため



地図 頼久寺の位置

の理論を（仮說的に）構築することである。

第一の点は、聞き取りがそれである。ただし、同じ聞き取りといっても心理学的アプローチと歴史学的アプローチは、①方法、②内容、③目的において違いがある。本研究の場合、以下の点を指摘できる。①心理学的アプローチでは、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を参照し、インタビュアーにさきだつて調査対象者に質問紙を配付し基本的な情報（生年月日、出生地、家族構成、学歴・経歴など）を得る。インタビュアーではインタビュアー・ガイドにしたがつて戦争体験についての質問を重ねていく。歴史学的アプローチでは、インタビュアーは先行研究や歴史資料によって基本的な知識を得たうえで、出来事に即して「事実」を確認し、「話者の経験がイメージできるように」<sup>5)</sup> するための質問内容を想定した。②歴史学的アプローチは出来事そのものを扱うのたいして、心理学的アプローチでは、ある出来事にたいする個人の経験、体験、それに行う。そうしたアプローチの違いは、③心理学が、出来事への心理的影響を見極め、体験の作用にたいする心理学的援助を目的とするのたいして、歴史学は過去の事象を再現する<sup>6)</sup> 歴史像を描くことに関心があることよつて生じる。

心理学と歴史学が異なるアプローチをとりながら、同じ戦争体験というテーマを扱うとき、いかなる協働可能性を見いだす

ことができるだろうか。それを検証することが、小稿の目的の第二である。

第二の問題関心にかかわつて小稿は、通常の歴史学的研究において行われるように事実関係を確定するために聞き取りのデータを用いるというスタイルをとらない。記憶はつねに改ざんされている。あるいは、形成途上にあると言ひ換えてもよい。聞き取りによつて引き出されるのは、「単にある個人の過去の物語ではなく、現在を經由し、かつそれを反映した過去」<sup>6)</sup> である。だとすれば、聞き取りの特性は、出来事そのものの検証よりも、出来事の社会的・歴史の意味を考察することにより適していると思われる。聞き取りの特性を活かした歴史叙述のあり方を考えること、それが小稿の目的の第三である。

以下では、聞き取りのデータをもとに精道国民学校の学童たちの経験を叙述し、当該期の時代的特質を考察するなかで、「子ども時代の戦争体験」を理解するための視点を提供したい。

## 一 芦屋市の学童集団疎開

最初に、芦屋市の学童集団疎開の概要を述べる。

芦屋市で学童集団疎開の実施計画がもちあがつたのは、一九四五年（昭和二〇）三月十七日の神戸大空襲以降のことである。相次ぐ大都市への攻撃は、集団疎開計画の大規模な修正をもた

らした。さかのぼること一九四四年（昭和一九）六月三十日、政府は「学童疎開促進要綱」を閣議決定し、尼崎市をふくむ一三都市の国民学校初等科三年生以上六年生までのうち、縁故を頼って疎開できないものを集団的に疎開させることとした。兵庫県では神戸市と尼崎市がその対象となった。昭和一九年段階では、阪神間の市町村は学童疎開の対象地域に含まれてはいなかった。また、当初集団疎開は暫定的に一九四五年（昭和二〇）三月末までとされていた。

一九四五年三月三十一日の『神戸新聞』は、阪神地方の学童集団疎開の「必要」に初めて言及した<sup>7</sup>。武庫郡鳴尾・本庄両村、西宮・伊丹両市に加えて芦屋市が紙面にあらわれるのは、五月十九日である<sup>8</sup>。「阪神間重要地帯における国民学校の学童集団疎開は文部省で特に疎開地域として指定せず、神戸、尼崎両市に含めて一括処理する旨の指令があつたので兵庫県では早速準備に着手、西宮、芦屋両市の学童二千八百名は岡山県、武庫郡御影、住吉、魚崎、本山四ヶ町村の学童一千六百名は鳥取県、兵庫県師範附属の学童百七十五名は県下へそれ／＼集団疎開させることになつた（後略）」<sup>9</sup>。

当時、精道国民学校の校長であつた岸野市五郎は、一九五二年発行の精道小学校『創立八十周年記念誌』によせた手記で次のように述べている。「昭和二十年の六月になると、わが芦屋市の精道、宮川両校に対しても、集団疎開の指令が届きました。

疎開先が岡山県でありましたので、とりあえず、宮川国民学校長蔭山忠雄氏と連立つて、岡山県庁を訪ねました。そして交渉を致しました結果、精道校は上房郡高梁町、宮川校は真庭郡落合村へ疎開することに決まりました。そこで保護者の方々の参加を願つて諒解をもとめ、児童にも、その趣旨をよく話ししました。それは政府の方針の通りで、田舎に縁故のあるものはなるべく個人疎開するように奨め、田舎に縁故をため、三年生以上に対して、集団疎開を勧奨いたしました」<sup>10</sup>。

高梁町への受け入れが決まるのは、六月末のことである。一九四五（昭和二〇）五月二十七日、岡山県は上房地方事務所長宛に、「西宮市・芦屋市学童ノ集団疎開受入ニ関スル件」を通知した<sup>11</sup>。上房地方事務所管内に西宮市・芦屋市からの学童約三〇〇名の受け入れを予定しているので、受け入れについて配慮するようにとり内容の指令であつた。詳細は後日連絡するので、とりあえず学童受け入れのための宿舍候補地を至急選定するように命じている。このときの調査では、高梁町は候補地にあがっていない。

六月十一日、精道国民学校から、集団疎開参加希望人数は合計二九七名であることが伝えられた<sup>12</sup>。同史料の欄外に、二九七名の受入先として担当者が記入したと思われる鉛筆書きがある。それは、川面、中井、中津井、皆部の各町村で、このときも、高梁町は含まれていない。

高梁町が受入先として確認できる最初の史料は、六月二十八日のものである。精道国民学校三年生から五年生の男女を高梁町で、六年生の男子を川面村で、女子を中津井村（のちに川面村へ変更）へ振り分けることが記されている（受け入れ学童総数は二二九名に減）。受け入れ宿舍の決定にはさらに日数を要したようである。

精道国民学校教員の楠本與一は焦っていた。「なかなか受入態勢完了の報が来ない。止むなく『七月一日出発す』の電報を強引に打つて、岡山県高梁町に向つて出発した」<sup>13</sup>。

実際、宿舍の決定と集団疎開の出発はほぼ同時であった。頼久寺が受け入れ宿舍に決定し、それが関係者に伝えられたことが確認出来る文書の日付は六月三十日である。そのことを上房地方事務所管内各町村長に通知したのは、翌七月一日であった。そのなかで上房地方事務所長は、「諸種の都合により今回は川面村及高梁町内寺院へ約二百五十名疎開致す事と相成り候に就ては何卒御諒承被下度、諸準備等経費有之候は、折返し御一報相煩度候、特に宿舍予定の各寺院に対しては貴職より可然御取計被下度御依頼致候」<sup>14</sup>と述べている。その内容から、精道国民学校の学童が高梁駅に到着した七月一日、頼久寺での受入態勢は充分でなかった可能性が高い。受け入れの決定から学童の到着までわずか一日という短兵急の出来事であった。

のちに述べるように、精道国民学校の学童たちが疎開先寮舎

となる頼久寺へ直接向かわず、少なくとも初日は高梁国民学校の講堂に寝泊まりしたというのは、受入先の決定に係る以上の理由があると考えられる。

こうして、芦屋市精道国民学校三年生から五年生の約一五〇名（「集団疎開綴」によると内訳は、五年生男子三二名、女子二八名、四年生男子三四名、女子一九名、三年生男子一六名、女子一五名である）は、頼久寺での集団生活を開始した。

疎開から一ヶ月半、八月十五日の終戦の詔勅は、ラジオを通じて頼久寺の庭で聞いた。兵庫県は、八月十六日付文部次官通牒にもとづいて、自分のあいだ集団疎開を継続することとした<sup>15</sup>。「出来るだけ早く学童疎開を全面的に解除したいのだが、政府の方針もあり、とくに神戸、尼崎市は転入者を抑制してゐるので」引き揚げは困難であるというのがその理由である<sup>16</sup>。ただし、神戸・尼崎両市以外の帰宅は保護者の状況によっては適宜許可することとした。「最近一般生活必要物資欠乏の影響を受けて集団疎開学童の食糧その他必需品についても憂慮すべき状況の地方もあり、このまま放置してをくと憂ふべき事態を招来すべき惧れがあ」<sup>17</sup>つたからである。

兵庫県からの集団疎開学童の引き揚げがはじまるのは、九月下旬である。約三ヶ月を過ごした頼久寺をあとにし、精道国民学校の学童が芦屋市に帰りついたのは、十月五日のことであった。

## 二 聞き取り調査の概要とその特徴

ここでは、聞き取り調査の概要を述べ、次章以下の内容理解のためにその特徴を整理して示す。

研究所がおこなった調査の概要は以下のとおりである。

研究所は、兵庫県こころのケアセンターと共同して、二〇〇六年度から「子ども時代の戦争体験」に関するインタビュー調査を行ってきた<sup>(18)</sup>。臨床心理学あるいは精神医学という臨床科学の立場から、子ども時代の戦争体験によるトラウマおよび喪失体験に注目し、トラウマ性記憶が戦後の生活におよぼした影響と、その影響の総和が社会にあり方にどのように反映したのかを考察すること、これが本研究の起点となった問題意識と課題である。それによって、日本社会がより包括的に戦争体験に直面していくための視点の獲得をめざした。対象としたのは、第二次世界大戦を子どもとして経験した世代の戦争体験である<sup>(19)</sup>。かつ、協力者の大半が阪神地域の居住者であったことは、研究所のインタビュー調査に特定の世代の特定の地域の戦争体験という性格を付与した。

研究をすすめるなかで、子どもに特有の戦争体験として疎開体験が浮かび上がってきた。そこで、阪神地域の子ども戦争体験として疎開体験に焦点をあてた研究を新たにスタートさせ

ることとした。その際、より多角的な視点から疎開体験をとらえるために歴史的な観点を加えること（文献調査との共同）となった。歴史研究者による聞き取りは以上の経緯を経て実施されることとなった。

最初の聞き取りは、二〇〇九年十月二十七日である。東谷智（甲南大学人間科学研究所兼任研究員・甲南大学文学部歴史化学科／日本近世史）、福島幸宏（甲南大学人間科学研究所客員研究員・京都府立総合史料館／日本近現代史）、石原みどり（甲南大学人間科学研究所博士研究員）が、精道国民学校同窓生の富永佑藏、永野和彦、加川昭子に加えて縁故疎開体験者の西川泰子（敬称略、以下同じ）に聞き取りを行った。

このときの聞き取りの記録（音声データとメモ）にもとづいて、より具体的に詳細な「イメージを形成すること」<sup>(20)</sup>を目的に、疎開先であった高梁町（現・高梁市）へのフィールドワークを実施した。二〇〇九年三月四〜五日のことである。フィールドワークには、同窓生として富永、永野（前出）、山口博、山本義多加、聞き手として東谷、福島（前出）および人見が参加した。フィールドワークのようすは、音声と映像で記録した<sup>(21)</sup>。

小稿は、以上の二回の調査によって得たデータを分析の対象としている。加えて、心理学的アプローチによる富永佑藏への個人面接<sup>(22)</sup>（聞き手＝森茂起／甲南大学人間科学研究所兼任



頼久寺の門前にて  
 写真左から、永野和彦さん、山口博さん、富永佑蔵さん、山本義多さん=2009年3月4日、東智撮影

研究員・甲南

大学文学部人間科学科／臨床心理学のデータも適宜用いる。

富永は、本プロジェクトの協力者を束ねる中心的な存在である。

富永は、早くから自らの学童集団疎開体

に追加するかたちで聞き取りは進行した。

このことは、富永の体験を相対化し、集団としての体験を浮かび上がらせる結果となった<sup>(24)</sup>。精道国民学校五年生の学童集団疎開における最大公約数的な体験として、およそ次の三点を指摘することができる。

第一は、さまざまな場面が食（飢え）の記憶と分かちがたく結びついていることである。食についての語りは、聞き取った内容の大半を占めたこともまた、特筆すべきである。「時間がたてばたつほど思い出すのはひもじかった」ことだという。

第二は、家族との別離である。意志に反して家族と引き離されたことによる哀しみの感情は「一生忘れ」ることはない。第三は、子どもと大人の距離感にかかわる語りである。それは、親、先生、地元との関係において子どもたちの体験を理解するために重要である。

### 三 聞き取りにみる精道国民学校の学童集団疎開

前章に述べた特徴に沿って、聞き取りの具体的な内容を記す。

#### 食（飢え）

食事の献立はほぼ毎日同じで、朝は大麦のおかゆ、昼は重

験に関心をよせてきた。一九五五年（昭和三十〇）十一月二十七日の「お礼訪問」をはじめ、たびたび高梁町や頼久寺を訪れている。「集団疎開 回顧録」をしたためたのは、「お礼訪問」の帰りの車中である。精道国民学校の学童疎開についての史料調査を独自に行い、一時的に行方が分からなくなっていた「集団疎開綴」をその熱意によって「探し出した」のは富永である<sup>(25)</sup>。聞き取りとフィールドワークでは、終始発言を主導した。富永の発言をうけた各メンバーが、その発言を修正、あるいはそれ



頼久寺にて=1945年撮影

湯、夜はおじやだった。そのどれにもじやがいがまじつていた<sup>(25)</sup>。

疎開してから一週間ほどで体調を崩す人が多くいた。「もう一週間もしたら、みななんだか悪くなったな。家じやろくなもの食ってへんのに、ここへ来て、オートミールやらなんやら食いだした」。「とにかく、家でろくなもの食ってへんのにやな、やっぱり家ではなんやかんや食ってたんや。せやけど、ここは集団生活ししたら、そんなんばっかりや。一週間かそこらで。

それは覚えている」

(山口)。

口に入れられるも

のは「何でも構わ

なかった。「ごま塩

の黒い粒を分けて食

つてた」。(山口)。

薬屋でビオフエルミ

ンを買って、おやつ

代わりにした。「食

べたときは甘くてお

いしかった」が、あ

とで「ますますお腹

が空い」た。ビオフ

エルミンは、健胃消化薬である。

お盆のお供えを盗み食いたこともあった。「ムラの人、文句いうてき」た(山口)。芋畑にも盗みにはいった。「芋がまだなりませぬねや。もうちっちゃいやつを取ってきては生で食べるんです。加工することだけへんから。盗んできたものやから」(富永)。「食わへんかったら命つながらへんで、ほんま病気になるてまうわ」(山口)。

川に魚がいて、先生が捕り方を聞いてきた。大きな竹を川幅いっぱいひろげて押していった。多くの学童がそれに参加した。獲れた魚は寮母さんに焼いてもらって食べた。

イナゴを捕ってきて、焼いてもらって食べたこともある。

疎開先の食事には、精道国民学校で使っていたアルミの器を使用した。芦屋市では学校給食が実施されていた。「数千枚の食器が、調理室の棚上に保管されていたが、これ等の食器が学童集団疎開に利用されようとは、誰一人想像してもいなかった」<sup>(26)</sup>。

三時にもらう大豆が「唯一の楽しみ」だった。煎った大豆を三〇粒くらいもらえた。まず皮をむき、それを食べ、二つに割ってその半分を食べ、さらにその半分を食べた。「三度美味しい」(西川)。胚も加えて、四度おいしさを楽しんだ。

父兄が面会にきた翌日、面会した学童は必ず下痢をした。面会するときこっそりもってきてくれる食べ物を食べ、「おいし

「いんやけれども」「体力がそれに応じられない」。

富永さんの四つ上の兄が面会に来たのは、敗戦後である。空襲で破壊された線路上を歩いてやってきた。兄は、サツマイモを「フライドポテトみたいにして（揚げて一人見）もってきてくれた」。翌日は、「あんじょうやっぱり下痢」をした。富永さんの父は医師だった。兄は下痢止めも持参してくれていた。「まずい、にがいというか、炭みたいな」「真っ黒」な薬だった。便が真っ黒になった。

勉強をしたという記憶はない。特に終戦後は「もう絶対なかった」（山本）。「おれの記憶では寝転がっているのが多かったように思う」（山口）。午後には昼寝の時間があった。栄養失調で「そんな活発になんか動かへん」（山口）。「そういわれてみるとなにをしとったんかな」というのは富永だ。

## 別離

一九四五年六月ごろ国民学校で、縁故疎開を希望するか、集団疎開を希望するかの調査があった。縁故疎開の勧奨によって、同級生の数が日に日に減っていた。

富永さんは、父から弟とともに集団疎開をするよういわれた。兄姉は学徒動員に行っていた。父に「国の考えていることややら間違いない」と言われたが、なぜ自分だけがいかないといけないのか、反抗した。「そらあ爆弾で死ぬかもわからん」、でも

「どうせ死ぬんやったら家族と死にたい」と、子ども心に思った。「おれだけ助かってどないすんねんという気持ち」もあった。「非国民になっても構うかい、わしはここにおりたい」という気持ちでいっぱいだった（富永）。

国策である集団疎開に応じないことは非国民となると考える富永がいた。戦時下に生きる子どもであった富永にとつて「非国民」は、その内容をしっかりと理解していたかは分からないが、極めて日常的な言葉であったという。

永野は一人っ子で、母の田舎の富山に縁故疎開する話があったが、友達のいる集団疎開を希望した。家族との別離だけでなく、疎開は友人やこれまでの人間関係をすべて断ち切るということを意味した。

出発は、一九四五年（昭和二〇）七月一日だった。当日汽車に乗るまで誰が集団疎開に参加するのか分からなかった。みな、家族に付添われて駅に行った。「今生の別れだ」と思った（西川）。

富永は、母に見送られて省線（現・JR）芦屋駅にいた。引き込み線に特別列車が到着したが、「嫌や、嫌や」と「ぐずぐず」していた。そうすると、おばさんに手を引っぱられて「もう乗りなさいいうて、窓から放り込まれた」。「ほんまにあれは一生忘れん」。汽車が出発し、三宮に停車すると、三宮からも疎開学童が乗り込んできた。そのようすをみて、「とにかく親

子で話しながら乗ってくるのをみてうらやましい」と思った。「今生の別れになるかもわからんのに」自分にはそれがなかった。「お袋の顔ばかりを思つて」いた。二つ下の弟に「弱いところをみせたらいかんと思うから、余計嫌やつた」。嫌で嫌で仕方がなくて、倉敷で伯備線に乗り換えたとき、空襲で「真っ黒になった人がたくさん乗ってきた」などと話す人もいるが、自分にはそうした記憶はまったくない。

加川は、妹ともに疎開した。「絶対泣かないでおこう」ときめていたのに「わーわー泣」いた。母は、「元気でね」といって、二両先の妹のもとへいってしまつた。発車するときにそばにいたのは、かわいがってくれた隣の奥さんだつた。

高梁に到着したのは夕方である。駅から高梁国民学校へと移動し、その日は高梁国民学校の講堂に雑魚寝をした。富永は、寝付けずに、女の子の髪をひっぱつたり蹴飛ばしたり、いたずらをした。翌朝、担任の伊勢田先生に呼び出されてものすごく叱られた。「後にも先にも先生にビンタをくらつた」のはこのときだけである。疎開にたいする「嫌な気持ち」がそういう行為になつたのだらうと、富永さんは振り返る（富永個人面接）。頼久寺に移動してから家族にハガキを書いた。検閲があるのさびしいとか、早く帰りたいとか書きたいことは書けなかつた。とにかく、無事について元気にしているということを書いた。戦後、そのときのハガキを母からみせられた。検閲印と、

先生が添えた「元気すぎて困っています」という一文が強く印象に残っている。

頼久寺は線路の前にある。いまは立派な白壁で遮られているが、当時はそれがなかつた。頼久寺の石段に座つて「この線路伝つて帰つたら家まで帰れるのか」という話しをした。「汽車が通つたらみんな泣い」た。

八月一五日の玉音放送は頼久寺の境内で聞いた。重大放送があるといわれて、境内に整列した。負けたとわかつたとき、「もう帰れる」と「とにかく喜」んだ。富永は腹の中で、「万歳これで帰れる」、「荷作りをせないかんと思つた」。「万歳」と口に出さなかつたのは、口に出すと非国民といわれるからだ。

しかし、すぐに帰ることはできなかった。実際には、戦後の疎開生活のほうが長かつた。

終戦後、子どもを引き取りにくる親がいる一方で、「食糧難は同じ」だから「向こうにおつてくれ」という親もいた。同級生が帰るのを目にすると、自分も帰りたいという気持ちでいっぱいになつた。

だから、引き揚げの日は嬉しくてたまらなかつた。「喜んで、喜んで」、車内では汽車の網棚にのつて寝転んだり、からだいっぱい喜びを表現した（永野）。車窓は、真っ暗だつた。三宮あたりまで来ると、山手のほうに「ボンボン」と灯りがともつていた。「灯りがついとるのは進駐軍が接收しとる家の電気

や」と聞いた(富永)。

木造の校舎は焼け、鉄筋の校舎だけが残っていた。校舎には、砂糖と防弾ガラスの臭いが充満していたという。真つ黒の砂糖が「くすぶっている」記憶がある。「ぶすぶすぶす」と。「食べたいものはくすぶって」いた。焼け跡の記憶は、空腹の記憶でもある。

子どもと大人

頼久寺内で、子どもたちの行動範囲はごく限られていた<sup>(27)</sup>。生活の場と決められた本堂から外に行くことはほとんどなかった。そのなかでも、子どもたちは大人たちの態度から、外部のようすを敏感に察知した。

芦屋市域が空襲にあったのは、一九四五年(昭和二〇)八月六日である。

空襲の被害については、「おそらく箝口令」がしかれていたと、富永はいう。「箝口令」について、教員であった松島正之助は、当時の日記に次のように記している。「八月五日 神戸東部、西宮空襲をラジオが報じる。子供等には知らせまいとの岸本、伊勢田両君の意見に従う。でも子供の吾々の顔色を見るのは早い。『先生何かあつたの』『僕の家は』やつぎばやに聞き漁る。午後四時遂に第一番にかけつけた津知の永井利夫氏によつて一切の状況が判明する。暗然として声なし。見れば子供等

が、その悲しみを直接聞くを避けて観音堂の周囲に不安な眼差を向けて取り巻く<sup>(28)</sup>。

富永は、駅のすぐ近くにある実家は「絶対焼けた」と思った。敗戦後、兄が面会に来てはじめて焼け残ったことを知った。

戦争の終わる頃、「大人ちゅうんか、保母(寮母―人見)さんとか先生がドタバタでした。原爆が落ちたというので、どうも負けるらしいということだ」「山口)。子どもなりに異変を感じとっていたようだ。「新型爆弾」という言葉も耳にした。ある生徒は新型爆弾の落ちるさまが頼久寺からみえたといった。その生徒には「ピカドン」というあだ名がついた。

八月十五日、重大放送があるといわれて境内に整列した。白いブラウスを着て、「正装」した。「ザーザー」というばかりで内容は分からなかった(西川)。担任の木村先生が「わーっと泣き出」した。先生の夫は戦死していた。それで、負けたということが「すぐ分かった」(加川)。

いづれも、子どもたちは、信頼する大人たちが語らないことによつて、逆にことの重大さを鋭敏に感じ取り、言葉で伝えられるよりも先に内容を想像してみずからを納得させようとするようすがみとれる。そのことは、地元との関係についてもいえる。

山口は、子ども心に、芦屋市との関係がうまくいっていないと感じていた。級長だった山口は、先生とともに食糧をもらい

に地元の数軒の家をおとずれた。「もらいに行くところが決まっていた」。「じゃがいもはここ、ほかのものは（このように一人見）」。普通は困っている人がおつたら喜んで渡すわな。そういうことは全然なかったものな。歓迎されていないと思つた。

前出の松島正之助は疎開初日の日記に次のように書いている。「重い荷物を背負つて町を通る。芦屋の子、よけい（ようけい、沢山の意一人見）きよつた。の声をコソボソと聞く」<sup>29</sup>。「夜中一人見」妙な音のサイレンが鳴る。警報らしい。荷車に家中の家財道具を積んだ町の人が西の窓からみれるローソクの燈を見て、疎開人が空襲するかの如く罵倒する<sup>30</sup>。

地元とも交流について、「全然そんな気配もなかった」と皆が口をそろえていう。「あらへん、全然なかった」。「だいたい私どもはあまり交流がなかったんですよ。地元の人もそうやし、個人的にやるのは別として、いわゆる学校と僕らが」（富永）。しかし、実際には食糧の調達など、疎開生活を地元との協力と理解なしにやっていくことは困難である。楠本は、「宿舍並御支援を受けた疎開先の人々」として、寮舎や行政関係者のほかに、高梁町風呂屋、散髪屋、避病院、「みつわさん」をあげ、「この機会に感謝の意を表したい」と記している<sup>31</sup>。

そこで風呂屋について訊ねると、月に数回、地元の風呂屋にいった、という。勤労奉仕で風呂屋に薪を運ぶ作業をしていた

ために、一番風呂に入れてもらったのだそうだ。女子は毛ジラミがたくさん発生して風呂を「ものすごい汚した」。そのため、もう一度掃除して一般用に開業した。

永野には、独自の交流があった。頼久寺の隣家にいた六年生のヨシオカさんがよく遊びにきていた。「さなぎの抜け殻みたいな」をもつてきてくれて、一緒に食べた。芦屋に帰る前日には、ヨシオカさんの母が握り飯を作つてもつてきてくれた。それを汽車のなかで食べた。「今でいう銀シャリですね」。その印象が「ものすごい強烈に残つて」いる。ヨシオカさんとはその後四、五年文通をしていた。

永野は、極めて社交的な性格で行動的でもある。これは永野の個人的な「交流」であったかもしれない。しかし、永野によれば、富永もふくめて友人三、四人と一緒に「さなぎの抜け殻みたいな」を食べたという。富永にその記憶はない。握り飯も、三人分の用意があった。「彼（富永一人見）ももうとるんですよ。覚えないうちゅうんですけどね」（永野）。

「交流」にはさまざまなレベルが考えられる。集団疎開にたいする行政や民間の「支援」は皆無ではなかった。永野の「交流」もあった。それでも、彼らが「交流」はなかったと断言するのはなぜだろうか。地元との「交流」について子どもたちは、大人たちのふるまいから「高梁町と一人見」芦屋の市と、もうひとつうまくいっていない」と感じていた。そのため、地元

との「交流」はなかったという記憶となり語りになったのではないだろうか。

#### 四 精道国民学校の学童集団疎開にみる

##### 「子ども時代の戦争体験」についての考察

ここでは、前章の聞き取りの内容から「子ども時代の戦争体験」の特徴を考察する。さらに、そこからうかがえる体験を整理するための二、三の論点に言及する。

みてきたように、語りの全編をつらぬく食べ物（飢え）の記憶や、家族との別離の体験は、戦時期の「矛盾の結節点」<sup>32</sup>として集団疎開があったことを明瞭に示している。「矛盾」の内容は、前者は、直接的に生命が脅かされるという体験であり、後者は生命への危険ゆえに自らの意志に反した別離を強いられるという苛烈な体験である。集団生活において子どもたちは、大人たちの行動や態度から戦局の推移を知り、みずからがおかれている立場を理解しようとした。

では、戦争にたいして子どもたちはどのような意識をもっていたのか。集団疎開にさいして「非国民になっても構うかい」といった富永に聞いてみよう。以下の「」は、富永への個人面接の記録からの引用である。

子ども時代の記憶について富永は、「駆逐水雷」という子ど

もの頃の遊びを回想している。「道の路地でよく学校の友達、いわゆるガキ共どもと一緒にかくれんぼやとか、缶蹴りだとか、駆逐水雷といって、いわゆる戦争ごっこですわね、帽子のかぶり方で戦艦とか航空母艦とか駆逐艦というのを定めまして、それが戦艦で一番強いんですけど、戦艦は駆逐艦にはやられるわけですわね。じゃんけんみたいなもんです。それで戦艦は航空母艦には強い、航空母艦は駆逐艦には強いと。そういうことですわね、見つけてタツチすると自分の陣地に捕虜として手をつないで」。「戦時色一色」の子どもの遊びである。

一九四一年（昭和一六）十二月八日の太平洋戦争開始の臨時ニュースをきいて、「これはえらいことや。これは覚えておこう」と思った。「子ども心には、日本は戦争に負けたことがないから、また今度も勝つやろうと」。国民学校一年生のときである。「それまでいろいろな、戦争するかもわからんとか、戦争せえせえというようなことが耳に入っておって、そして自分でそういう、今日は特別な日や、と」。戦争と戦争にたいする大人の意識や態度が、日常的に子どもたちの意識や行動に影響をおよぼしていたことがうかがえる。

しかし、富永のなかで戦争が現実感をともなって認識されていたかは、疑問である。

一九四四年ごろになると、芦屋市でも頻繁に警戒警報や空襲警報が鳴り響いた。授業中に警戒警報がなると、「皆浮き足た

つて帰る準備をした」。はじめて空襲を目撃したときは恐ろしかった。一九四五年（昭和二〇）五月十一日、川西航空機深江工場を「目掛けて爆弾を落とされた。昼間でした。このときはすごいなと思いましたね。いわゆる爆弾が落ちてくる音、これがザーッと庭をさらえて掃くような、ザーッとという音がして、ダダダダーッと響くんですけれども、それをいわゆる防空壕のなかから自分の家を、庭に掘ったものですからね、家がビシビシビシッと、ガラスがビューンと震えるのを見ながら、怖いなあ」と。

他方で、神戸の空襲については、「こちらには、自分には危害がかからんと思うてますから、のんきな気持ちで見とおった」という。「神戸がやられているといことだけでね、死んだ人が多しんやろうなと思いがら」。自分は戦火のなかを逃げまわった「経験をしていないです、おかげさまで」。

富永の語りには、戦争（とりわけ空襲）にたいする現実感が妙に欠如しているようにみえる。それは、単に空襲を直接体験していないというだけではない。空襲とそれによる死は、「軍国少年」の兵隊への「あこがれ」と同じ程度の現実感しかともなっていないかのように思われる。「軍国少年じゃないとは思わんんですが、あこがれましたよ。例えば予科練であるとかね、私は大きくなったら兵隊になって天皇陛下のためというのはいやというほど聞かされたし、言わされもした」。戦争への邪気

なき加担がここにはある。

こうした現実感のなさが集団疎開に際して富永に、「そらあ爆弾で死ぬかもわからん」、でも「どうせ死ぬんやったら家族と死にたい」、「おれだけ助かってどないすんねんという気持ち」を抱かせたのではないか。富永にとつて、家族は現実の存在であつたが、戦争やそれによる死はそうではなかつた。

このことは、子どもの戦争体験の特徴を考へるうえで看過できない点であると思われる。戦時期の子どもが戦争（現実）をどのように認識していたかは、先に指摘した「戦争への邪気なき負担」の内実を問う問題であると考えられるからである。また、戦時期の子どもの体験の実際（子どもにとつての戦争とは何だつたのか）を理解するためにも重要である。第三章で具体的にみたように子どもたちは、家族や友人、学校の先生との関係のなかで戦争（現実）を受け止めようとしていた。子どもの戦争体験の特徴のひとつがここにある。

富永にとつての戦争体験はやはり疎開体験がそれである。疎開が「一番つらかつた」。疎開こそが富永にとつての戦争の現実であつた。富永は、戦後も疎開にこだわりつづけた。現在まで、疎開先であつた高梁市と頼久寺を訪れたのは、六、七回にのぼる。

疎開体験へのこだわりは、富永にかぎつたことではない。かつての学童たちは戦後、みずからの体験を記録し続けた。疎

開関係資史料の収集・保存も、体験者たちが中心となつて行つてきた<sup>(33)</sup>。

ここに、戦争体験における疎開体験（とりわけ集団疎開体験）の特徴のひとつがある。学童集団疎開は、その体験を共有することができるといふことである。なぜ学童集団疎開体験は共有可能なのか。また、体験の何を共有しているのか。

まず、共有を可能たらしめる社会的条件について、聞き取りを実施した精道国民学校の同窓生の場合に即して考えてみたい。

第一は、戦前の人間関係が戦後も維持されたことである。こんかい聞き取りに協力いただいた方たちのうち、戦地あるいは空襲などによる家族の欠損あるいは家族そのものを失った経験をもつ人は少ない（西川の兄は戦死）。富永は避難させていた家財の一部を空襲で失ったが、家屋は無事だった。戦争による直接の喪失体験がない（少ない）ことは、戦後の生活に一定の安定をもたらしめた。彼らが共有するのは疎開体験である。体験を共有する具体的な場として、同窓会（クラス会）があった。同窓生を偲ぶ気持ちは、集団疎開への「ちよつと懐かしい」（加川）という思いと重なる。

同窓会（クラス会）への参加者は、男性が多いという特徴がある。「男のほうはわりあい近辺に、この阪神間にいらつしゃるうんですけれど、女の方は結婚して」「皆さん遠くへ行つてらしたりして」（西川）。

第一回目の聞き取りののち、フィールドワークの日程を調整していたときである。「女性のかたはなかなか難しいと思う、出るのね。特に一泊なんていうたら非常に難しいと思う。そやから、お供できるのは男だけかもわかりません」（富永）。体験の共有のありかたには、ジェンダーが存在する。

第二は、「子ども時代の戦争体験」における、「被害者」性の保証である。共有しているのは、「被害者」という立場である。これは、戦場体験と大きく異なる点である。子どもの「被害」体験は、世間に受け入れられやすいし、それゆえに共有も容易となる。

学童集団疎開体験を、語りの共有と共有のされ方にみる特質（喪失体験の有無やジェンダー、「被害者」性など）という観点から考察することは、戦争体験の聞き取りをより精緻に分析するための視角として不可欠である。こんかいの調査で、「自分よりもつらい経験をした人がいるはずだ」といった語りへの抑制——戦争体験の語りにはしばしば見受けられる——はみられなかったという点は注目すべきである。集団疎開が共有される戦争体験であることが、語りを促していると考えられる。縁故疎開や残留組の語りに比べて、集団疎開体験の語りの豊富であることも体験の共有にかかわる問題であるのかもしれない。

以上、子どもにとっての戦争という視点と、集団疎開体験の共有と語りという観点から、疎開体験を理解するうえで重要と

考えられる問題に照準して述べた。これらは、戦後史にもかかわる論点である。戦後日本の経済成長を担ってきた世代の背景にはつねに、「子ども時代の戦争体験」があった。富永の場合、自らが子どもであったからこそ子どもと同じ経験をさせたくないという思いがあり、それがみずからの疎開体験への強いこだわりとなっている。こうした思いが積み重なっていまの社会が存在する。疎開体験は「過去」でありながらよくよく現在の問題であることを、聞き取りは教えてくれる。

まとめにかえて

### ——聞き取りの方法と歴史叙述についての

#### 若干の考察

小稿を締めくくるにあたって、聞き取りの方法論的課題に言及しておきたい。それは、心理学的研究と歴史学的研究の協働可能性および、聞き取りの特性を活かした歴史叙述のあり方を考えるという最初に示した課題への現時点でのわたしなりの答えである。

実は、小稿をまとめることは予想以上に「困難」であった。その「困難」の正体は何か、考え続けていた。わたしがたどり着いた答えはおよそ次のようである。

小稿が分析の対象とした聞き取りは、おもに歴史学を専門と

するメンバーによって行われた。その記録を読むと、聞き取りが歴史的な関心にもとづいて行われたことは明白である。歴史的な関心とは何か。「事実」の確定である。具体的に、一回目の聞き取りにおける実際の質問を順に並べてみる。

学童集団疎開に行かなければならないことをいつ、知ったか（精道国民学校の学童集団疎開計画がもちあがったのはいつ、か）。出発までの経緯。出発時のようす。高梁町到着直後のようす（高梁国民学校からいつ、頼久寺へ移動したか）。頼久寺での生活。終戦および終戦後の生活。疎開からの引き揚げ（引き上げを知ったのはいつ、か）。

あきらかに出来事の時系列に沿って聞き取りが行われている。とりわけ、その出来事がいつおこったのかということに強い関心がある。話しが前後すると聞き取る側がそれを「整理」（話しを元に戻す）する。語り手も、「そうですよ。おたくのほうでどんどん言うてもらわんと、こつちが勝手に暴走しますから」と、「整理」を積極的に容認している。

こうした聞き取りの方法について、当時はとくに違和感を覚えることはなかった。その後、筆者はライフストーリーをベースとする聞き取りを行ってきた<sup>34</sup>。その経験を経たいま改めてこの聞き取りを読み返してみると、非常に「困難」を覚えた。それは、聞き取りから新たな歴史像を構成するという意味での「困難」である。

わたしたちは、文字資料を主とし聞き取りを従とする従来の傾向にたいして反省的な立場にたち、両者を対等にあつかうことで疎開についての新たな歴史像の形成をめざした。たしかにこの歴史研究者による聞き取りは、これまで判明している事柄に、新たな「事実」を付け加えることができたという点では有意義ではあった。地元との交流のありようや頼久寺での生活の具体相は、「聞き取り」によって解決すべき点<sup>〔35〕</sup>として重点的に聞き取った結果知り得た、文字資料からはみえてこなかった事柄である。

しかし、「文献調査の前提」<sup>〔36〕</sup>としてはじめに示したような歴史学的アプローチで実施した聞き取りから、疎開体験者の体験の全体像を把握し、新たな疎開像を構築するという当初の目的を果たすという点では、大変「困難」であった。

さきに示した質問項目にかえろう。質問した内容は従来の疎開研究（先行研究）から得られた視点を踏襲している。すなわち、従来の視点はそのままに精道国民学校の学童集団疎開への聞き取りを行ったのである。

こうした聞き取りのあり方からは、聞き手と語り手の多元的で往復的な実践<sup>〔37〕</sup>は生まれにくいと思われる。聞き取りの場では、調査者（聞き手）と被調査者（語り手）は明確に主体と客体に区分されていて、両者は同一平面上にない。だからこそ、聞き手の関心のみ依拠した聞き取りでは「対話」<sup>〔38〕</sup>が成立

しにくい<sup>〔39〕</sup>。聞き手の関心は、しばしば「語らせる権力」<sup>〔40〕</sup>となる。歴史研究者による聞き取りは、語り手に「証言」（歴史的に意味・意義のある語り）としての重要性をしばしば意識させる。「話し手は聞き手の年齢や職業あるいは「知りたがっていること」を敏感に察知して話しをすすめる」<sup>〔41〕</sup>からである。聞き取り調査において、「調査者の聞き取りの場（フィールド）における関与と位置取りが考察の対象になりうる」<sup>〔42〕</sup>ことがすでに明らかとなった今日、歴史研究者であることに無自覚な聞き取りはもはやゆるされない。

先に示した「文献調査の前提」という言葉には、聞き取りは文字資料の「補完」であるというわたしたちの無意識が表出しているように思われてならない。そもそも、聞き取りを方法として選択した理由のひとつに史料制約をかかげるあたり、聞き取りという方法にたいするわたしたちのスタンスのあやうさをはからずも露呈している。聞き取りの特性を活かすならば、あるいは聞き取りの「前提」として文献調査を位置づけることはできなかったのか。そのことによってはじめて聞き取りによる新たな歴史的叙述の可能性が開けるのではないか。すなわち、個人の人生におけるその経験の意味を問うこと（体験者がなにもっとも重大と考えているか、なぜそれを重要と考えるのかを分析の対象とすることなど）によって新たな論点を引き出すことが可能になるのではないか。個人の人生におけるその経験

の意味を問うことは、極めて心理学的な視点である。

小稿の「困難」は、方法（事実を確認するための聞き取り）と目的（聞き取りから新たな歴史像を構築すること）の齟齬によって生じた困難であった<sup>43)</sup>。それでも敢えて小稿が、時系列を解体して語りの特質を見いだすことで体験の意味を考察したのは、聞き取りから歴史叙述を行うというのはどういうことなのかをわたしなりに考えてみたからである。かかる試みの成否については大方の批判を俟つこととし、擱筆する。

註

- (1) 金子洋子『流れ去ったおにぎり——戦時下を生きた小学生の記録』二〇〇六年、非売品、富永佑藏「集団疎開 回顧録」一九五五年、私家版など。
- (2) 一九五五年一月三十日付『夕刊岡山』、二〇〇七年四月二十七日付『朝日新聞』。
- (3) 二〇〇六年四月二十六日、瀬戸内放送。
- (4) 詳細は、森茂起・港道隆編『戦争の子ども』を考える——体験の記録と理解の試み』平凡社、二〇一二年を参照のこと。
- (5) 東谷智「疎開体験の調査——精道国民学校の場合」(註(4)所収)、一四二頁。

- (6) 蘭由岐子「病いの経験」を聞き取る——ハンセン病者のライフストーリー』皓星社、二〇〇四年、六八頁。

- (7) 『兵庫県学童疎開関係史料集成 第一輯』甲南大学人間科学研究所、二〇一一年、一七三頁。

- (8) 後出の西川泰子によれば、同年四月頃両親が役所で精道国民学校が岡山へ集団疎開するという話を聞いてきたという。そのため西川の両親は岡山県津山への縁故疎開を決めた。「子どものころだったから、岡山に行ったらもうみんな近くかと思っておりますけどね、違ったんですよ」。

- (9) 註(7)、一七九頁。

- (10) 岸野市五郎「追憶」芦屋市立精道小学校『創立八十周年記念誌』一九五二年、五五頁。

- (11) 岡山県上房地方事務所「集団疎開綴」(高梁市立図書館所蔵)。「極秘」「至急」の朱印あり。

- (12) 同右。

- (13) 楠本興一「印象にのこること」芦屋市立精道小学校『創立八十周年記念誌』一九五二年、八六頁。出発の際の心境について楠本は同手記で次のように述懐している。「一週間前に、貨車三台で送った学童疎開荷物が、六月三十日の岡山市空襲で安着しているか否かを案じながら、三日分の食料を持参して出発したのである。近辺の学校出はぐずぐずしている中に七月五日の空襲に疎開準備一切をやかれ出発不能になった。よくも出発したものである」。

- (14) 註(12)に同じ。
- (15) 註(7)、一八六〇一八七頁。
- (16) 一九四五年九月十五日付『神戸新聞』(同右、一八八頁)。
- (17) 同右。
- (18) 森茂起・加藤寛・大塚紳一郎・赤松尚美「子ども時代の戦争体験に関する研究——第二次世界大戦体験者への調査より(第一報)」日本トラウマティクスストレス学会第七回大会報告、二〇〇八年のちに、一九三〇年から一九四五年生まれを対象を拡大した。戦争の記憶をもっていないと思われる世代まで含んでいるのは、(戦後の)大人の語りによって形成される戦争体験も視野に入れているからである。直接の体験にくわえて、戦後の生活における戦争体験の扱いも含めて「戦争体験」と考えている。
- (20) 註(5)に同じ。
- (21) 聞き取りとフィールドワークの詳細は、東谷智「戦争体験の聞き取りと記録化——歴史学の立場から」(甲南大学人間科学研究所『心の危機と臨床の知』vol.11、二〇一〇年)および註(5)論文を参照いただきたい。
- (22) 二〇一〇年二月二十四日に実施。
- (23) 註(5)に同じ。
- (24) ある出来事について富永がまったく記憶していない場合も、しばしばみられた。記憶されている体験と、あいまいな、あるいは全く記憶されていない体験の差は、個人にとって出来事が持つ意味の差違を示していると考えられる。集団での聞き取りは、集団としての体験を浮かび上がらせると同時に、出来事の個人のとっての意味を際立たせる。このことは、聞き取りの方法として、個人と集団の場合の違いとして興味深い。
- (25) 元・教員の辻久子は、次のように回想している。「風が吹き荒れた朝、庭へ出てみると二人の男の子、なんともいえない顔で立っている。そばには西条柿、さもおいしそうな色をしてたくさん落ちていた。思わず「ニヤリ」(註、西条柿はしぶ柿)。「水でも飲んでごう。チヨツとでもましや」これは、夕食前の井戸端風景。空腹をつかの間だけでもまぎらすはかなき生活の知恵。「先生、梅干の種の芯、おいしんだよ」朝はおかゆ、昼はじゃがいもと南瓜の煮たもの、夜は盛り切り御飯、毎日大体決まった献立である。芦屋から送られた衣料で食糧と交換、先生達の買い出しも楽じゃない。しかし発育盛り、足ろうはずがない。食べられるものならなんでも食べてみる梅干の種を歯で二つに割ると中から白い芯が出てくる。これでも結構美味しい珍珠である。わかもと。これは勿論米糠が入っているため甘くて美味しいおやつ。おやつといえど、大体一握りのいり豆、それでもあればよい方。しかし、鮎の住む高梁川で泳いだあとの名産の白桃のおいしかったこと、只一つの楽しい思い出である」(辻久子「あつ松林が残ってる」芦屋市立精道小学校『精小創立一〇〇周年誌』、四二〜四三頁)。聞き取りでは、白桃の話は出なかった。

- (26) 註(13)、八五頁。
- (27) そのことを聞き取りで山本は「三八度線」と表現した。
- (28) 松島正之助「思い出の記(疎開日記より)」芦屋市立精道小学校『創立八十周年記念誌』一九五二年、九三〜九四頁。
- (29) 同右、九二頁。
- (30) 同右。
- (31) 註(13)、八七頁。
- (32) 大門正克「戦争と戦後を生きる」小学館、二〇〇九年、一八頁。
- (33) その代表的な成果として、全国疎開学童連絡協議会『学童疎開の記録』全五巻(大空社、一九九四年)がある。
- (34) 拙稿「ある女学生の戦争体験」『歴史と神戸』第四九巻第五号、二〇一〇年、同「戦争の子ども」における心理学的研究と歴史的的研究の相補性」(註(4)所収)。
- (35) 二〇〇九年三月八日実施の「戦争体験の記録化」プロジェクト班会議における東谷智レジュメ「戦争体験の記録化と歴史学」(註(21)の東谷二〇一〇年に所収)。その日、聞き取りとフィールドワークを終えて、「戦争体験の記録化」プロジェクトの中間報告が行われた。報告者は、「戦争体験の記録化」プロジェクト班員を代表して、東谷智、福島幸宏である。
- (36) 二〇〇九年三月八日実施の「戦争体験の記録化」プロジェクト班会議における福島幸宏レジュメ「現地の文字資料からわかること」。「文献調査の前提」には、先行研究の整理(精道国民学校の学童
- 集団疎開についてこれまで明らかになっていることと、集団疎開政策全体における精道国民学校の位置を主な内容とする)に、聞き取りが加わる。
- (37) 保莉実「ラディカル・オーラル・ストーリー」御茶の水書房、二〇〇四年。
- (38) 桜井厚「インタビュ어의社会学——ライフストーリーの聞き方」せりか書房、二〇〇二年、三〇〜三一頁。
- (39) 高梁市への疎開についての「班員のイメージを形成する」ためのフィールドワーク(註(5)、一四二頁)では、疎開体験者と班員の「対話」はそもそも期待されていない。
- (40) 桜井厚「語りたいことと聞きたいことの間で」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房、二〇〇〇年。
- (41) 中村政則『昭和の記憶を掘り起こす』小学館、二〇〇八年。
- (42) 註(6)、六九頁。
- (43) このことは、「事実」の確定のために聞き取りを用いることを否定するものではないことを、付言しておく。

(ひとみ さちこ) / 日本近代史